

令和 4 年度

入学者選抜学力試験問題

国 語 (後期)

〔注 意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は 13 ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て、問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って、4 枚の解答用紙に受験番号および氏名を必ず記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された場所に記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は、句読点と括弧(「 」, 『 』など)を字数に数えること。
6. 解答は、内容とともに、用語、表記、構文にも注意して書くこと。
7. この冊子は持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

しばしば耳にすることだが、高校生が大学入学以前に身につける、もしくは身につけることが期待される英語力のなかで、読む力はじゅうぶんな水準にあると考えられている。社会一般でそのように考えられているフシがあるし、大学に入ってくる学生たち自身からも、そのような声を聞くことがある。難しい入学試験をくぐり抜けてきたのだから、そして入学試験の問題は基本的に読解問題だったのだから、読む力はもうじゅうぶんに備わっているはずだ、という考え方である。大学に入ったあとは、もはや英語を読む授業など必要ない、と考える大学関係者すらいる。

たしかに、大学の入学試験で出題される英語の問題は、筆記試験を課す性質上、読む力を試すという面が大きい。問題も、それほどやさしいわけではない。英語を読む力という点から言えば、入学試験のための準備をするなかで、かなりのレベルに達することができはるはずである。

外国語の運用能力について語る際、しばしば外国語の四技能という言い方をすることがある。

四技能とは「読む」「聞く」「書く」「話す」の四つの能力のことである。大学の入学試験といった、大勢の受験生が対象になる場合、客観的評価をおこないやすい能力と、そうではない能力とにちがいが出てくるのはイタシ方ない。いま四技能について「読む」「聞く」「書く」「話す」という順序で紹介したのは、そのまま筆記試験で測ることが容易な能力の順番を示したまでである。「聞く」については、音源を受験生に届ける工夫さえすれば、「読む」について、出題は容易である。「書く」力を測るには、採点のための膨大な労力を覚悟しなくてはならず、どうしても、分量を制限せざるをえない。「話す」にいたっては、数千人、数万人単位の受験生に対処することを考えると、実際の能力を測るのは不可能だと言ってよい。

そのような、筆記試験を実施するにあたっての制度的制約もあり、読む力、ついで聞く力を試すという性格が、入学試験においては強くなる。少し一般化すれば、情報を受けとる能力(理解力)を測定することが、情報を送りだす能力(表現力)を測定する

ことより、重視されることになる。そして、このことをめぐり、ふたつの主張があらわれる。

ひとつは、すでに紹介した、入学試験を通過してきた大学生には、読む力の訓練は不要だという意見である。英語の入学試験が、読む力や聞く力といった理解力の測定であつた以上、入学試験に合格した学生には、もはや理解力（とくに読む力）はじゅうぶんに備わつていとみなすことができる。あとは、入学試験で測定することが難しかった、表現力（とくに話す力）を磨く機会を提供すればよい、とする考え方である。

近年は、大学生の学力低下が一種の社会問題となり、しばしばその英語力も槍玉にあがる。中学校や高等学校で身につけておくべき力が、じゅうぶん身につけていない学生がふえている、という指摘がなされる。また、いわゆるAO (Admissions Office) 入試や推薦入試による入学者がかなりの割合をしめるようになり、入学試験の性格そのものが大きく変わったとも言われる。したがって、入学試験を通過してきたからと言って、大学生として期待される学力がじゅうぶんに備わつていのかどうかは、別の問題である。入学試験に合格したことが、そのまま英語を読む力が身につけていることの保証にはならない。それはそれとして、大学の(筆記)入学試験で課している読解力のレベルが、一般的な英語の運用能力の期待度からみて、どの水準にあるのかは考えてみる必要がある。たとえば、上位レベルにあると考えられる日本の大学生たちの読む力が、英語運用能力という点からみて、じゅうぶんな水準に達しているかどうかは、あらためて検討してみよう。

もうひとつの意見は、大学の入学試験で、読む力のような受け身の理解力ばかり測定しようとするために、日本の英語教育がねじ曲げられている、日本人英語学習者の英語力に偏りが生じている、という主張である。小難しい——としばしば言われる——読解問題の答えを出すような訓練ばかり強いられるから、簡単なコウトウの受け答えもできない大学生が大量に生まれる。日本人英語学習者の多くが「話せない」状況を生んだ元凶は、大学の入学試験にはかならない。そもそも、英語を読む力を、

それほど重視する必要はないのではないか、という意見である。

時に必要悪のように言われる入学試験の弊害を突こうとする意見である。だが、これには日本人英語学習者が教室で学んできた英語力をどう評価すべきか、という問題が密接にからんでくる。日本人英語学習者の学習到達度は、どの点から測定し、どのような力を評価すべきなのか。外国語としての英語学習において、読む力はどのように位置づけられるべきか。読む力を重視することには、どのような意味があるのか、という原理的な問題をまず考えなくてはならない。

A 日本の英語教育をとりまく基本的な条件を考えてみよう。

現在(二〇一一年)は、小学校段階での英語教育が実施に移されようとしていて、英語教育をとりまく状況は急速に変化している。ただし、英語が基本的には教室で学ぶ外国語であるという条件に変わりはない。ここに教室という言葉で言いあらわしているのは、中学校や高等学校といった学校の教室ばかりではない。多くの生徒たちが通う塾や予備校、さらには英会話学校のようなものをふくめて考えてもよい。日本に住んでいるかぎり、ほとんどの生徒たちは、教室という場で、外国語として英語を学ぶことになる。もちろん家庭環境によっては、家庭内で英語を使用する状況もありうるだろうが、そのような例はまだ少数だと考えてよい。

それは、一步教室の外へ出たら、そこは日本語の世界だということの意味する。英語圏に移住して、生活言語として、生きてゆくために英語を学ばなくてはならない、という状況ではない。英語を学ぶにあたり、教室を出たところが英語の世界なのか、日本語の世界なのかという点は、大きなちがいとして考慮する必要がある。

教室を出たところが日本語の世界であって、生活言語として英語を学ぶ環境にない場合、「読む」ことは、外国語として英語を学ぶ重要な回路となる。読む力を養うことは、「聞く」「書く」「話す」をふくめて、総合的な英語力を伸ばしてゆくための、大事な基礎を固めることになる。英語を学ぶ手段、回路としての読む力は、あらためて見直されてよい。

残念ながら、現在の英語教育に関する論議のなかで、読む力を重視しようとする意見は、少数意見にとどまるかもしれない。日本語ですべて用が済んでしまう環境に暮らしていて、外国語として英語を学ぼうとする際、読む力を養うことがいかに有効な回路となりうるかについて、それほど深くは認識されていないのではないかと思われるからである。

読む力について考えようとする際、押さえておくべき問題がひとつある。それは、読む力と語彙力との関係である。

読む力と語彙力の関係について一般に言われていることのなかで、かねがね気になっていることがある。それは「単語の意味さえわかれば英語は読める」、「単語の意味を覚えれば英語は読めるようになる」と考える英語学習者がきわめて多いことである。

語彙力、つまりどれだけの単語を知っているかが、英語の運用能力の大きな部分を占めることはまちがいない。知らない単語ばかりが並んでいる英文は、どれほど構文が単純であっても、ほとんど理解できない。これは読むことについても、聞くことについても言える。話す場面においても、必要とされる単語を知らなければ、たちどころに困ってしまうことになる。英語しか通じない環境で、病気や事故に見舞われた際、自分の症状や状況をうまく伝えられるかどうかは、語彙の力によるところが大きい。

だが「単語の意味さえわかれば英語は読める」ことはけっしてないし、「単語の意味を覚えれば英語は読めるようになる」こともない。これは断言してよい。英文を読むためには、文法の力や、構文を把握する力、さらには文脈を読みとる力など、さまざまな力が要求される。とくに、文法と構文に関する知識、それを目の前の英文に適応しつつ読み解く力が不足しては、いくら膨大な量の単語の意味を知っていても、英語が読めるようにはならない。ある単語がどのような文法的機能をはたし、各々の単語がどのような構文上の要素を成しているかを把握できなければ、文全体の意味はわからない。

どのようなことが話題になっているかは、どのような単語が並んでいるかで、おおよその見当はつくかもしれない。だが、どのようなことが言われているかは、並んでいる単語をマンゼンと眺めるだけではけっしてわからない。ある表現が目に入るとし

て、それが肯定されているのか否定されているのかすら、知りようがない場合がある。知っている漢字が並んでいるからといって、漢文が読めるわけではないのと、それは同じことである。

語彙力が「単語の意味」に関する知識、というかたちで捉えられることが多いのも問題である。「単語の意味」と言う場合、多くの日本人英語学習者は、ひとつの英単語にひとつの日本語を対応させて考えようとする。そのうえで「意味」を丸暗記しようしたりする。中学生、高校生レベルの英語学習においては、そのような段階を通過することも、時に必要とはなるだろう。だが、最終的には、語彙に関するそのような考え方からは抜けだす必要がある。

一般に「単語の意味」と言われるものは、英語の単語が持つ意味の広がりの一部をとらえた「翻訳」にすぎない。ひとつの英単語にひとつの日本語を対応させるのは、あくまで便宜的なものにすぎないこと、そこにしばしば無理が生じているという点を、一度は認識しておく必要がある。これは、ひとつの単語が多くの意味を持つ、いわゆる多義語にのみ関わることではない。

^B語彙力とは、ある単語の文脈上の意味を見定める力のことである。ある単語がどのような意味の広がりを持ち、同じような意味を持つ単語とどのような関係にあつて、どう使い分けるのか、またどのような表現のなかで用いるのか、といったことに関する知識である。そのような知識を自分自身の表現のなかに生かしてゆける能力である。語形を変化させる力(たとえば *society* という名詞から *social* という形容詞を導く力)も必要になる。そのような応用力をとまなう知識があつてはじめて、真の語彙力が身についたと言える。

語彙力をふやすために必要となるのは、英語と日本語の訳語の一对一の対応を暗記することではない。ある単語が実際に用いられる例になるべく多く触れる努力をすることである。要するに、たくさん読むことだと言える。読むためには語彙力が必要である一方、語彙力をふやすためには読む力がなくてはならない。まずは手近な辞書を引くところからはじめて、たくさん読める力、読む体力をつけてゆかなくてはならない。

文章を読むなかで語彙力をふやすことにより、実際に使える力も身についてくる。読むことは、単に情報を受けとる能力(理解力)にのみ関わることではない。情報を送り出す能力(表現力)を養うことにもつながる。応用力をともなった語彙力を身につけることで、書く力も話す力も身につけることができる。

インプット(input)とアウトプット(output)という言葉を用いるなら、インプット(入力)あつてのアウトプット(出力)だということになる。インプットなしのアウトプットというものは考えにくい。そして、日本語で日々の生活がいとなまれる環境でのインプットを考えるなら、読む、ということがきわめて重要な役割をはたすことに気づかされるはずである。ことは、語彙の問題だけではない。英語の運用能力全般に関わることである。「聞く」ことにも、「書く」ことにも、そして「話す」ことにも関わることである。

英語が日常の生活言語である場合と、日本語の環境にあつて教室で英語を学ぶ場合とでは、英語の学び方はおのずから異なる。教室のなかに擬似的な英語の環境を作りだすとしても、時間的な制約はまぬがれないし、教室を一步出たら、そこは日本語の世界である。日本語をこそ、きちんと使つてゆくべき世界である。そうした基本的な英語学習の条件に目を向けた時、日本人英語学習者に開かれた学習の回路として、読む力の重要性が浮かびあがる。読む力を向上させ、読む体力をつけることが、総合的な英語力を養う手段となる。またそうであるからこそ、学校教育の場では、読む力をきちんと評価する必要がある。

先に、大学入学時の大学生の英語力に関して、読む力はじゅうぶんなのか、という問題設定をおこなつた。結論から言えば、そこが出発点なのだ、ということにつきるだろう。大学の入学試験準備をするなかで、読む力については、かなりのレベルに達することができる。だが、おそらく大学生たち自身が自覚しているように、すぐには読めない英語、よくわからない英語が、身の回りには溢あふれているはずである。日本人英語学習者のほとんどは、自分自身の読む力はけつしてじゅうぶんだと思つてはいない。大学に入つたら、もう読む力の訓練など必要ないと考えるのは、誤りである。聞いたり、書いたり、話したりするためにも、読む力を養つてゆくこと、読む力を維持してゆくことが重要になる。「話す」ことだけにかぎつても、日本語の環境のな

かで力を伸ばしてゆくには、読む力の支えがどうしても必要となる。

読む力を軽視することは、けつしてできない。読む力を伸ばし、維持する努力をつづけることが、日本人英語学習者には必要である。そのように考えて、教室で大学生に接してきた私が、驚きをもって迎えたニュースがある。高等学校の英語の授業がまったくちがうものになろうとしている、というのである。それは、多くの日本人英語学習者が置かれている状況、条件を無視していると思え^Cたし、高等学校で身につけておくべき英語力が、今後は保証されないことを意味していた。その影響は計り知れない。大学に身を置く者として、そして日本人として英語を学び、教えてきた者として、これはけつして看過できないことである。

(菅原克也『英語と日本語のあいだ』一部改変)

問

- (一) 傍線部AからCまでについて、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に改めなさい。
- (二) 傍線部Aについて、筆者が考える「日本の英語教育をとりまく基本的な条件」とは何か、八十字以内で説明しなさい。
- (三) 傍線部Bについて、筆者が考える「ある単語の文脈上の意味を見定める力」とは何か、百五十字程度で説明しなさい。
- (四) 傍線部Cについて、筆者が考える「高等学校で身につけておくべき英語力」とは何か、百五十字程度で説明しなさい。
- (五) 文章全体に適切な、十字以内のタイトルを付けなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

アダム・スミスによれば、秩序ある社会における善悪の一般的な判断基準、つまり、公平な観察者の判断基準は、その社会の外部から超越的に与えられるのではなく、その社会を構成する諸個人の交際の歴史を通じて、内生的に形成されるものである。したがって、公平な観察者の判断基準は、それが適用される社会に固有なものであり、社会の慣習から影響を受ける可能性がある。では、公平な観察者の判断基準に対して、社会の慣習は、どの程度の影響をもつのだろうか。言いかえれば、異なる慣習をもつ社会では、道德の基準も大きく異なるのであろうか。スミスは、この問題を『道徳感情論』の第五部「明確な道徳的認および否認の諸感情に対する慣習と流行の影響について」において考察している。(中略)

スミスによれば、人間の性格や行為に対する社会的な評価基準のうち、慣習や流行によって大きな影響を受けるのは、挨拶、表情の作り方、感情表現の仕方など、社会の存続にとって必ずしも重要とはいえない種類の性格や行為についてである。社会の存続にとって重要な種類の性格や行為、つまり正義に関わる性格や行為については、社会的な評価基準は慣習や流行によって大きな影響を受けることはない。

(中略)

慣習と流行に関するスミスの基本的見解を、さらに推し進めるならば、ひとつの社会において諸個人が各自の性格や資質の違いを乗り越えて道徳的基準を共有することができるように、諸社会も各社会の慣習や文化の違いを乗り越えて道徳的基準を共有することが可能であるといえる。すなわち、個人と個人の間においてと同様、^A社会と社会の間にも、公平な観察者の判断基準を形成することができるはずである。(中略)各国は、公平な観察者の立場に立つことによつて、国際問題を平和的に解決することが可能である。特に、正義に関する国際的な公平な観察者の判断基準は、国際法、または「万民の法」の基礎を与える。各個人の同感にもとづいて作られる国内法が社会秩序の形成と維持を可能にするように、各国の同感にもとづいて作られる国際法は、国

際秩序の形成と維持を可能にする。

しかしながら、実際には、国際秩序を形成することは、国内秩序を形成することよりも、はるかに困難である。それは、ひとつには、他国の国民とは地理的、言語的、文化的な隔たりがあるために共通の公平な観察者の基準を形成しにくいからである。それ以上に重要なのは、各国の政府や国民が、自国民に対しては用いる公平な観察者の判断基準を、他国民に対しては用いない傾向にあるということである。この傾向は、各国の国民が他国民に対して「国民的偏見」をもっているために生じる。スミスは、『道徳感情論』の第六版において、国民的偏見の起源と影響を扱っているので、この問題を考察することにしよう。

スミスは、人間は、全人類の幸福を願ひ、自分の幸福よりも全人類の幸福をつねに優先させること、つまり「普遍的仁愛」をもつことはできないと考える。スミスは述べる。

宇宙という偉大な体系を管理運営すること、すなわち、すべての理性的で感受性のある存在の普遍的な幸福の世話をすることは、神の仕事であつて人間の仕事ではない。人間に割りあてられている仕事は、ずっとつましいものであるが、人間の能力の弱さと理解力の狭さに、はるかによく適合したものである。それは、自分自身の幸福、そして、自分の家族、自分の友人、自分の国の幸福の世話をすることである。（『道徳感情論』六部二編三章）

人間は、まず自分自身の幸福を願ひ、その次に自分の家族、そして自分の友人や知り合いの幸福を願う。スミスは、このような序列をもつ幸福の願望を「愛着」と呼び、それが「慣行的同感」(habitual sympathy)によつて生まれると考える。私たちは、日常生活において、特定の人びとと繰り返し同感し合うことによつて、その人たちに対して愛着をもつようになり、彼らや彼女らの幸福を、他の人びとの幸福よりも優先的に願うようになる。この願望は、実際に同感し合う頻度が低くなればなるほど希薄になる。ふつう、私たちは、自分自身を除けば、まず、同感の頻度が最も高い家族に愛着をもち、次に友人や隣人、そして知り合いなどに愛着をもつ。さらに、私たちは、愛着の強さに応じて、その人の幸福のために自分自身の幸福を犠牲にしてもよいと思う。あるいは、その人の幸福を増進することが自分自身の幸福であると思う。

スミスによれば、このような慣行的同感によって導かれる個人の愛着が「祖国への愛」を基礎づける。スミスは、次のように述べる。

われわれが、その中で生まれ、教育され、そして、その保護のもとで生活を続けている、国家（あるいは主権）は、通常の場合、われわれの善悪の行動が、全体の幸福または悲惨に大きな影響を与えうる最大の社会である。したがって、国家は、元来、非常に強く、われわれにゆだねられている。われわれ自身だけでなく、われわれの最も強い愛着のすべての対象、すなわち、われわれの子どもたち、親たち、親族たち、友人たち、恩人たち、われわれが自然に最も愛し最も敬う人びとは、同じ国家の中に含まれるのが普通である。彼らの繁栄と安全は、ある程度、国家の繁栄と安全に依存する。したがって、国家は、元来、すべての利己的な意向によってだけでなく、すべての私的な仁愛的意向によっても、われわれにとって愛すべきものとされるのである。このようにして、われわれが国家と結びつくため、国家の繁栄と栄光は、われわれ自身に、ある種の名誉をもたらすように思われる。（『道徳感情論』六部二編二章）

祖国への愛は、人類全体に対する愛——普遍的仁愛——から導かれるものではない。日本人が日本に愛着をもつのは、日本が地球の一部であるからではない。また、日本人が日本人であることに愛着をもつのは、日本人が人類の一部であるからではない。日本という国の中に、あるいは日本人という集団の中に、自分と家族、そして自分が愛する人びとのほとんどが含まれるからであり、自分たちの安全と繁栄が、日本の安全と繁栄に依存すると思うからである。そして、自分の行為が実際に影響しうる最大の社会が日本社会であると考えるからである。このように、^B祖国への愛は、普遍的仁愛からではなく、私的な愛着から導かれる。

注意すべきことは、祖国への愛は、慣行的同感から直接導かれる愛着ではないということである。私たちは、祖国の人びととすべてとつき合い、同感し合うことはできない。また、国自体と同感し合うこともできない。要するに、祖国への愛は、家族や友人などと違って、自分にとって実体のないもの、直接に同感し合うことができないものに対する愛着、つまり仮想的な愛着で

あるといえる。しかし、私たちは、いったん祖国への愛をもてば、祖国の繁栄と栄光を自分の誇りと感じるようになる。そして、私たちは、場合によっては、自分の命や利益、あるいは自分が愛する人びとの命や利益を、祖国のために犠牲にしてもよいと思うこともある。私たちは、そのような気持ちを強くもち、それを実行する人を「愛国者」と呼ぶ。愛国者について、スミスは次のように述べる。

自分の生命を、社会の安全のために——あるいは社会の虚栄のためであっても——投げ出す愛国者は、最も厳密な適切性をもって行為するように見える。彼は自分自身を、中立的な観察者が自然かつ必然的に彼を眺める見方で眺めているように見える。すなわち、彼は自分自身を、公正な裁判官の目に映る大勢の中の一人にすぎず、その中の他の誰よりも重要ではなく、多数を占める人びとの安全に、便宜に、そして栄光にさえ、いつでも自分を犠牲にし、捧げるべきものとして眺めているように見える。

しかし、この犠牲が完全に正当で適切であるように見えたとしても、それを行なうのがいかに困難であるか、そして、いかにわずかな人しかそれを行ないえないかを、われわれは知っている。だから、彼の行動は、われわれの全面的な認識だけでなく、われわれの最高の驚異と感嘆をかきたて、最も英雄的な徳に対して正当に与えうるあらゆる喝采の値うちがあるように思われるのである。（『道徳感情論』六部二編二章／傍点は引用者による）

この引用文において注意すべきことは、スミスは、愛国者の行動に関して、「見える」、あるいは「思われる」という言葉を使っていることである。つまり、スミスは愛国者の行動が世間の目にどのように見えるかを論じているのである。世間の目には、愛国者の行動は、公平な観察者の判断に厳密にしたがう行動であるように見え、称賛に値する行動であるように見える。

しかし、はたして愛国者の胸中の公平な観察者は、彼に対して世間の見方と同じ見方をしているのであるか。そもそも、私たちは、自分や自分の家族、自分が愛する人びとの安全と繁栄の土台であると思えばこそ、祖国を愛するのではなかったか。それにもかかわらず、祖国への愛のために、自分の命、あるいは自分が愛する人びとの命が犠牲になってもよいと考えるのは、個人の中で愛着の転倒が起きていると言わなければならない。おそらく、愛国者の胸中の公平な観察者は、彼に対して、自分

の命と自分が愛する人びとの命をできるかぎり守るよう命令するであろう。少なくとも、国家の虚栄のために、自分や自分が愛する人びとの命を犠牲にすることを是認することはないであろう。自分自身と自分のまわりの人びとに対する愛着を基礎とした祖国への愛は、自然であり、また必要であり、公平な観察者が是認するものである。しかしながら、それを超える祖国への愛は、不自然であり、倒錯的な偏愛になる危険性をもつといえる。

さらに、祖国への愛は、近隣国民に対する国民的偏見を引き起こす危険性をもつ。スマスは次のように述べる。

われわれは、自国民に対する愛によつて、近隣国民の繁栄と勢力拡大を、悪意に満ちた嫉妬と羨望をもつて見るようになる。隣り合つた諸国民は、彼らの紛争を解決する共通の支配者をもたないので、継続的な相互の恐怖と猜疑さいぎの中に生きていく。各国の主権者は、彼の隣人たちから、ほとんど正義を期待できないので、自分が受けるのと同じだけわずかな正義をもつて隣人たちを取り扱おうとする。国際法——独立諸国家が相互の取り扱いにおいて守る義務があると考へていると公言し装うルール——の尊重は、実際のところ、単なる偽装と公言にすぎないことが多い。取るに足りない利害のために、また、取るに足りない挑発のために、それらのルールが毎日、恥も良心の呵責かしゃくもなく、すりぬけられたり、侵犯されたりするのを、われわれは見ている。各国民は、隣国の強化や勢力拡大の中に、自国が征服されることを予見するか、あるいはそのように想像する。この国民的偏見Dというくだらない原理は、しばしば、祖国への愛という高貴な原理の上に築かれていく。〔道徳感情論〕六部二編二章)

スマスによれば、祖国に対する愛は、近隣諸国民に対する国民的偏見を生み、近隣国民に対する嫉妬、猜疑、憎悪を増幅させる。その結果、自国民に対しては守られる正義の感覚が他国民に対しては守られなくなる。国際法が、しばしば蹂躪じゅうりゅうされるのはこのためである。おそらく、私たちが国民的偏見に陥るのは、私たちの祖国への愛が、自然で現実的な範囲を超えて仮想的な偏愛となる場合であろう。すなわち、自分や家族、自分が愛する人びとの幸福に影響を与えるものとしての国に対する愛着を超えて、国がそれ自体で価値をもつと思われようになると、人は、自国が隣国よりも、あらゆる点で優れていることを望むのである。言いかえれば、人は隣国が自国よりも、あらゆる点で劣つていることを望むのであり、また、そうであると信じているので

ある。これが国民的偏見である。

実際、当時のイギリス国民とフランス国民は、双方とも、相手に対して国民的偏見をもっていた。そのため、イギリスとフランスは、動機と結果から見て適切な範囲を超えた戦争を続けてきた。

(堂目卓生『アダム・スミス』一部改変)

問

(一) 傍線部Aの「公平な観察者の判断基準」は、現実の国際関係においては形成が困難だと筆者がいう理由を百三十字以内で説明しなさい。

(二) 傍線部Bについて、「私的な愛着から導かれる」ということができるのはなぜか、本文の「慣行的同感」の語を用いて七十字以内で説明しなさい。

(三) 傍線部Cについて、本文に即して七十字以内で説明しなさい。

(四) 傍線部Dについて、筆者は「国民的偏見というくだらない原理」がどのような場合に生まれると考えているか、九十字以内で説明しなさい。

令和4年度個別学力検査

問題訂正

試験区分：後期日程

教科等：国語

国語（後期）

問題冊子12ページ 前から7行目

下から7文字目

(誤) . . . に中に . . .

(正) . . . の中に . . .